



熊野川町指定文化財
四滝正覚寺の経塔

「正覚」は正覚寺の略称で、「下木」とも書かれています。正覚寺の山号は「正覚山」といいますが、これは正覚寺の山号ではなく、正覚寺の山号は「正覚山」といいます。正覚寺の山号は「正覚山」といいますが、これは正覚寺の山号ではなく、正覚寺の山号は「正覚山」といいます。

山門わきに転がっていた説明板

なぜ正覚寺にあった？

この那智参詣曼陀羅があった正覚寺は、北山川を見おろす新宮市熊野川町四滝の集落の中にあつた。合併前の熊野川町で、教育長を務めた木村靖さんによると、1982年から89年まで務めた木村靖さんによると、「正覚寺に古い参詣曼陀羅と観心十界図が残っている」ことを檀家から職員が開き込んだ。京都に修理に出し、83年4月に町文化財に指定されたといふ。

正覚寺は禅宗臨済宗。なご正覚寺は、現在新宮の曹洞院の末寺である。



正覚寺の山門から北山川を臨む

那智参詣曼陀羅

新宮市・正覚寺 江戸時代



おなじみ那智参詣曼陀羅には歴史上の有名人が数多く登場する。那智の滝に打たれるのは文覚上人、二の瀬橋の手前で桜を見るのは和泉式部、如意輪堂と本殿の間の広場にいるのは後鳥羽上皇か後白河法皇……といった風に。

なぜ那智なのか？

参詣曼陀羅は、本宮でなく速玉でもなく、なぜ那智なのか。林雅彦さんは、三つの理由をあげる。その筆頭が、那智山は歴史や説話文学の舞台であり、有名人が登場し、なじみやすい。花山法皇も平惟盛もこの絵の中にいるという説もある。その二、那智山は現世と

来世と二世にわたって人を救ってくれる観音信仰の舞台。だから浜の宮の補陀洛山寺は、南の海の観音浄土をめざす補陀落渡海の基地になった。また観音霊場三十三カ所巡りの一番札所であり、ふりだし地になった。その三、15世紀中頃にできた本願所という組織が、最も活発に活動したのが那智山だった。山伏と比丘尼がペアで全国行脚、熊野詣を広めた。江戸時代初めには那智山には7カ寺の本願所が記録されていたという。この絵は、06年の絵解きサミットの際に複製された。

里帰り展示

21日から新宮で熊野比丘尼の諸国定着展。新宮市立歴史民俗資料館で21日から始まる「熊野比丘尼の諸国定着」展で、正覚寺の「那智参詣曼陀羅」「熊野観心十界図」が、寄託先の県立博物館から里帰り展示される。3月30日まで。同展は、全国を遊行・勧進した熊野比丘尼が諸国に定着した実態に迫ろう、との狙い。

開催中の24日午前9時半から根井浄・龍谷大教授が「熊野比丘尼の諸国定着」の題で講演する。土・日曜午後には絵解き実演がある。



◆「くまの文化」次号は13日付です